

古代中国の名宝 —細川護立と東洋学—

三宅 秀和

註：本報告は展示品等を紹介するプレゼンテーションソフトのスライドを利用する形で
行われた。本稿では紙幅の関係で、そのうち一部のみを掲載することとした。また、掲
載しなかったスライドも含め、行論上スライドを利用したことを示す必要があると思わ
れたところは【スライド：某某】という形などで示した。

ただいまご紹介にあずかりました永青文庫の三宅秀和と申します。よろしくお願ひいたし
ます。

3館連携の展覧会ですが、展示に即した形でお話していこうと思います。そうすることが
恐らくそのままこのシンポジウムで私に課せられた報告の責を果たすことになろうと思
います。

とはいえ、永青文庫がどういう施設か、から、まずお話ししたいと思います。先ほどから
細川という名前を出していただいていますけれども、細川と永青文庫とが結びつかない方も
あると思います。そこからお話を始めます。

熊本藩 54 万石の大名であった細川家の 16 代である細川護立（1883～1970）が設立した財
団、それが永青文庫です。熊本藩 54 万石の大名であった細川家に伝来・集積及び細川護立
自身が収集した文化財を継承して、その保存管理・研究・展示公開を行っています。文京区
の目白台 1 丁目にありますので、ここ、学習院の百周年記念会館からは歩いて 30 分かか
らないくらいです。

【スライド 1：永青文庫外観、永青文庫周辺略地図；本稿には掲載せず】

こちらが永青文庫の外観です。地図でも示しました。学習院から雑司が谷の駅までは近い
ですね。そこから目白通りをそのまま東の方に進んでいただいて、椿山荘の手前で 1 回だけ
曲がれば永青文庫に着きます。ぜひ皆さんいらしてください。

永青文庫はまず熊本藩細川家伝来の大名道具、これを所蔵している美術館です。それに加



スライド1 永青文庫外観



国宝「時雨螺鈿鞍」



「唐物尻膨茶入 利休尻ふくら」

スライド2

えて細川護立の蒐集品があります。屈指の白隠コレクションがあります。白隠（1685～1768）というのは江戸時代中期の禅僧です。それから近代絵画。これは護立と同時代の画家の作品を集めたものです。それから中国の考古遺物。中国の陶磁。最後の2つが今回のシンポジウムと関わるものです。

【スライド2：国宝「時雨螺鈿鞍」，「唐物尻膨茶入 利休尻ふくら」】

大名道具といっても一言でどういうものがあるか。まずは武家の武具・馬具などがあります。武士というのは戦いをする人たちですから、こういうものも当然あります。そのなかには戦闘に使用するというよりも、宝物というべきものもあります。細川家は先祖の1人が千利休の弟子であり、その関係で利休ゆかりの茶湯道具が比較的多くあります。

【スライド3：「乞食大燈像」白隠慧鶴筆，重要文化財「黒き猫」菱田春草】

これが白隠慧鶴が描いた「乞食大燈」という絵ですね。そのお隣が「黒き猫」，菱田春草（1874～1911）が描いたものです。こういうものが，細川護立が蒐集したものになります。



「乞食大燈像」白隠慧鶴筆



重要文化財「黒き猫」
菱田春草



スライド4 細川護立 (40代から50代にかけての頃)

スライド3

【スライド4：細川護立写真】

それでは、細川護立はどういう人かですが、明治16年(1883)に生まれて、昭和45年(1970)にお亡くなりになった方です。この写真(スライド4)は40代から50代にかけてのもの。細川家14代目の細川護久の4男として生まれました。お母様は佐賀藩主の鍋島直正の4女、宏子。15代当主であった長兄護成もりしげの死去に伴い、細川侯爵家の家督を相続します。その後は、美術品を積極的に収集して、先ほどのような白隠の禅画や刀剣・刀装具、横山大観や菱田春草など同時代の絵画、東洋の文物、そういうものを集めていった方です。

履歴を見ると、明治39年(1906)、学習院の高等科を卒業しています。24歳のときでした。昭和22年(1947)に財団法人学習院の理事、昭和25年(1950)に永青文庫を設立、昭和26年に東洋文庫の理事長になっています。

ここから3館連携の東洋学というテーマに即した部分になります。

大名家の子弟として細川護立は生まれていますから、それ以前からあった漢詩、漢文の教育を受けていました。5つぐらいから漢籍を読んでいたようです。今でいえば幼稚園児が『論語』を素読するということになりますね。それから、百人一首のように『唐詩選』に接していました。学習院の同人雑誌に漢文の文章を載せたりしたそうです。肥後漢学といわれていた、旧領国の、つまり熊本出身の漢学者たちとの交流もありました。それはやはり熊本



細川護立 (数え 4 歳)
明治 19 年 (1886)



細川護立 (数え 12 歳頃)
明治 27 年 (1894) 頃

スライド 5

を治めていた大名家の出身だからでしょう。その一人として竹添井井^{せいせい} (進一郎, 1842~1917) を挙げておきます。17, 18 歳ぐらいのときには, 明治 33 年, 34 年 (1900, 01), 義和団事件があった頃ですが, 北京に旅行しています。

このように中国と身近に接していて, そして, 中国の文化への憧れを強くしていったことがわかります。

護立の言葉でそれを振り返ってみましょう。晩年に鼎談とか対談をしているのですが, そこから文章を抜き取ってきました。

【スライド 5: 細川写真 2 点, 護立の言葉】

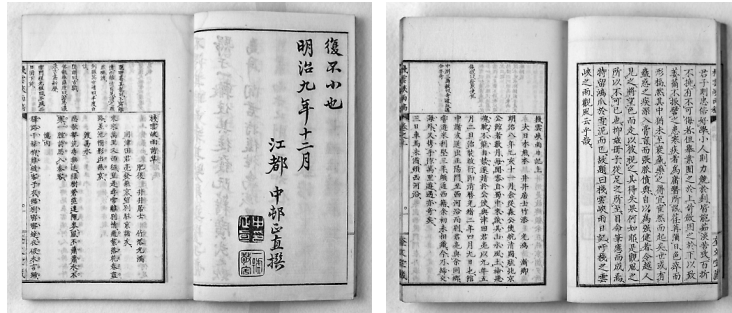
ちょこんと座っている姿, かわいいですね。

「僕は子供の時, 五つ位から漢籍を読ませられて, 唐詩選は今でも覚えている位で中国の事は昔から好きでした。」

「僕は, 子供のとき, 百人一首をやる代りにね, 『唐詩選』のカルタをさせられたものでね。」「うちで作ったんで。」うちというのは, つまり細川家ですね。細川家で作ったものがあったそうです。「厭でも応でも覚えちまつたんです。そんなことで, 好きだつたんですね。」

「それに僕の国は非常に漢学者が多かつたからね。」

「狩野先生に僕は習つた。」狩野直喜 (1868~1947) という方です。「それからもう少し前の竹添先生。この人は偉い人でしたよ。蜀に行つてね。その日記は有名なものですよ。『棧雲峡雨日記』といつて。その竹添さんに初め漢詩を習つた。それを十七ぐらいでやめてしまった。とても本ものに敵わんと思つて。あれ, 続けてやつてればよかつた。」



スライド6 『棧雲峡雨日記並詩草』

【スライド6：『棧雲峡雨日記並詩草』】

その『棧雲峡雨日記』です。北京から蜀に入り、その後は長江を下って上海に至る大紀行です。紀行文が上と下とあり、旅行の途中のいろいろを詠んだ漢詩をまとめた詩草がついて、『棧雲峡雨日記並詩草』として出版されています。これを護立はいていたわけです。こういう大詩人が家庭教師のようにして漢詩、漢文を教えてくれた。そういう本物に会うと、なかなか10代の多感なときには、このようには自分は大成できないだろうと思ってやめてしまったというのです。

「陶器にはまだ興味がなかったが、中国趣味というのはあった。北京へ一番はじめに行ったのは明治三十三年か四年だった。」

「明治三十三年に義和団の事件がおこって、(中略)急に行きたくなって、学校の春休みに行っちゃったんだ。十七、か八、病気が直った後でしたね。」

同じときに漢詩に憧れ、それをつくっていこうという気持ちがあったんですが、それはあきらめる。でも、その一方で、中国に行ってみたいということがあって、これは行動に移す、という10代でありました。

大正15年2月から翌昭和2年7月まで護立はヨーロッパ旅行をしています。1年半まではいかないですけども、そのぐらいあります。当然ヨーロッパ旅行とはいっても、その当時のことですから船旅もあります。この間に著名な美術収集家を訪ね、学者と交流しています。それから、村松先生の発表にも出てきましたパリの美術商のC.T.ルーやヴィニエなどから唐三彩や考古の銅器類を購入したりもしています。護立コレクションは、それまでは刀剣・刀装具、禅僧の書画、同時代の絵画などでしたが、この旅行を契機に東洋美術の分野に大きく広がりを見せることになりました。

それで、どういうきっかけで行ったのかというと、大正15年5月にロンドンで開催の万国議員商事会議に貴族院から派遣されたんです。会議は1週間でした。この1週間だけの旅行ということではなくて、その後を存分にいかそうと最初から考えていたようです。中国陶



スライド7 重要文化財「三彩蓮華文圈足盤」



スライド8 重要文化財「三彩宝相華文三足盤」



スライド9 国宝「金彩鳥獸雲文銅盤」

器の欧州における状況を見て、その研究と収集の絶好の機会とみなしていました。中国陶器に関する文献を集めていたとも晩年語っています。

【スライド7：重要文化財「三彩蓮華文圈足盤」】

重要文化財の「三彩蓮華文圈足盤」であるとか、

【スライド8：重要文化財「三彩宝相華文三足盤」】

「三彩宝相華文三足盤」。これは類品がイギリスのビクトリア&アルバート美術館にしかないものです。三彩というと、先ほどの「三彩蓮華文圈足盤」のように色がまじり合ってしまうんですけども、これは蠟抜きと、それから、溝を切っていることで、釉が流れて溶けたのがまじり合わない。そういうことで明確な図柄が浮かび上がっています。名品といって恥じないものですね。

【スライド9：国宝「金彩鳥獸雲文銅盤」】

こちらもルーから購入しました。これが恐らく中国考古遺物の初めて、唐三彩ではない、陶器ではないものの、初めて購入した銅器ではないかと思います。いずれにしてもかなり早い段階の購入です。

それで、学者たちとの交流が多くありました。レジユメにも一部示しましたが、梅原末治



スライド10 重要美術品
「金銀錯鳥獸文管金具」



スライド11 国宝「金銀錯狩獵文鏡」

(1893~1983), 考古学者。奥田誠一 (1883~1955), 東洋陶磁研究所の設立者。関野貞 (1867~1935), 建築史家で, それにとどまらない古文化財の調査・研究をされている方です。国史の黒板勝美 (1874~1946)。西洋史の村川堅固 (1875~1946)。内藤虎次郎 (内藤湖南, 1866~1934)。先ほど名前が出てきた狩野直喜です。

【スライド: 梅原末治と細川護立の写真; 本稿には掲載せず】

梅原末治はこの写真の方です。濱田耕作 (濱田青陵, 1881~1938) に学んで, 京都大学の教授になった方です。晩年の姿ですね。

細川護立が金彩鳥獸雲文銅盤を C. T. ルーのところで購入することになったときには, 梅原末治も同行して, 学術的立場から購入を勧めました。あわせて購入を勧めたのが

【スライド10: 重要美術品「金銀錯鳥獸文管金具」】

こちらの重要美術品の「金銀錯鳥獸文管金具」です。目にしてきれいなもの, 美しいもの, 形としてよさそうなもの, というのは護立は目でわかるのですが, それを学術的な立場からこれはどういう用途で使われたのか, 類品にどのようなものがあるのか意見し, 類例の少ないものだから日本にもたらすと研究に資するものだ, ぜひ購入していただきたい, などというのが学者の立場です。そういうことを学者たちはしていました。護立にとっては大事な情報を教えてくれる方々でもありました。

【スライド11: 国宝「金銀錯狩獵文鏡」】

これは壺中居から購入したものです。日本国内で買ったものですね。昭和4年 (1929) の晩秋に壺中居の方が目白の屋敷に持ち込んだそうです。そして護立はわずかな時間で購入を決しました。このときは梅原末治のような学者はそばにいなかったもので, 直感で買ったとい

うことです。これはもう一目見てすばらしいものだと思ったというようなことをいっています。

細川護立が目利きだったことを示す話ですが、ただ、単純にそういうことにはならなくて、いいものだということをいっていく中で、やはりおつき合いのある学者にぜひ見せたいんですね。小場恒吉であるとか、梅原末治です。ただ、梅原としては、お殿様がいいものだとおっしゃっているけれども、自分の目で見えていいものじゃなかったらどんな顔をしたらいいんだろうということ、なかなか京都から東京に来なかったようなんですけれども。

これは非常にすばらしいものです。これは拡大した部分ですね。本当に手で示すとこれくらいのもので、ちょっと離れたぐらいでもこの点々の中に文様が埋もれてしまっていて図柄がわかりにくくなってしまいます。私もこの鳳凰の顔とかに気づくのは随分時間がかかりました。下の方、オオカミが腹開きになっていますが、頭、背中、そういう脊髄の方から見て、腹を広げて描くのがこの戦国時代の頃の描き方だったようです。その中でトラあるいはヒョウと向き合っている武人、これは非常に具体的、具象的で図柄としても珍しい。この時代は渦巻文であるとか幾何学的な文様はありましたが、こういったものはやはりほかにないようですね。

【スライド：『欧米に於ける支那古鏡』（刀江書院，1931年），『洛陽金村古墓聚英』（小林寫眞製版所出版部，1937年）；本稿には掲載せず】

それで、すぐには見に来なかった梅原末治ですけれども、ここに2冊挙げておきましたが、研究対象にして、成果を世に問うています。ほかにもいっぱい出しています。

それから、奥田誠一ですね。護立が語るところによると、「僕は若いころから陶磁が非常に好きだった。学習院を卒業する時分だ。友人に大河内正敏とか奥田誠一さんなどがいて、陶磁の話随分聞いた」などといっています。これは学習院を卒業するところですから、かなり若いですが、その後アクションを起こして陶器類を買うようになるのはしばらく後だったようです。

昭和2年（1927）に日本に帰国した細川護立がC. T. ルーから唐三彩や銅器を購入する際、同行してもらっています。奥田誠一と関野貞です。奥田誠一と関野貞と護立の3人で検討を加えて、どれを買うべきかとか、そういうふうにしたようです。上海を出航した船でルーが米国に向かう途中に横浜に寄港したときに、東京で急に会うことにしたそうです。

【スライド12：重要美術品「銅製馬車」】

こういう、漢代の車の細部がどういうものだったのか、具体的な形で伝えてくれるものであるとか、この「三彩宝相華文三足盤」もそのときのものでした（スライド8の重要文化財「三彩宝相華文三足盤」と同図）。そういうふうには梅原末治だけでなく、ほかにも学者たち



スライド12 重要美術品「銅製馬車」



スライド13 重要美術品「金象嵌越王銅矛」

が知恵と見識を持って細川護立の収集活動を支えていたわけです。

【スライド13：重要美術品「金象嵌越王銅矛」】

「金象嵌越王銅矛」ですが、わかりますでしょうか、上から片側に3文字ずつ、右に1,2,3, 左に1,2,3, と6文字、字が書いてあります（スライド13）。これは有名な勾踐の後の越王颯與という方の名前を示したものと今では考えられていますが、この字が読めなかった。護立が入手後いろいろな方に問い合わせて、ここにずらっと名前が挙がっている方々にご協力をいただきました。最後は梅原末治が写真を送った郭沫若、この方が読みました。

この「金彩鳥獸雲文銅盤」は、護立が入手した中国考古の初めての作品だと思われるとお話ししましたが、これを購入するときに個人的な思い出があります（スライド9の国宝「金彩鳥獸雲文銅盤」と同図）。それが発掘支援の思い出です。護立は大正14年（1925）から行われた漢時代の楽浪の発掘の費用を支援していました。それは前年の春に黒板勝美と村川堅固から発掘したいという希望を聞いて資金提供することにしたものです。黒板勝美は発掘のリーダーを務めたのですが、村川堅固の方はちょっとわからないのですが、この方は熊本出身ですので、そういうご縁があったのかもしれない。

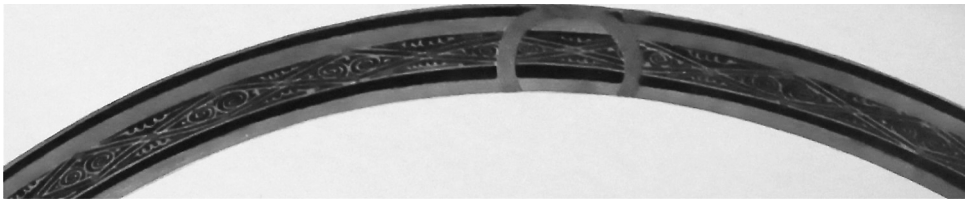
銅盤を購入するにあたっては、この発掘支援を行っていたことが関わっています。パトロンですから、発掘成果の報告が続々と護立のもとに届けられます。

送ってきた写真でこのような漆の盤の文様を見覚えたんですね。それで、護立としては銅の盤と似通っている、楽浪と関係のある、つまり自分が発掘を支援したあの楽浪と関わりがあるものだったらぜひ日本に持って帰りたいと、パリのルーのお店で思ったわけです。それで、具体的にどれがというと、酷似するものはないんですけども、雲の表現であるとか、やはり中国の漢時代の文様ですから、何となく通じている部分はあるなと思います。

【スライド14：有紋漆盃文様模写】



スライド 14 有紋漆盃文様模写
(『楽浪』(東京帝国大学文学部編, 刀江書院, 1930年) 図版 76 部分)



スライド 15 有紋漆盃文様模写
(『楽浪』(東京帝国大学文学部編, 刀江書院, 1930年) 図版 76 部分)

【スライド 15：有紋漆盃文様模写】

それから、盤の縁の部分（スライド 15）ですね。こういう三角状でジグザグといくもの、菱形をなすような文様。ここでは三角があって両方に丸がある、こちらには渦巻きが2つある、という形ですけれども、その三角で区切って菱形が作られるところ、そのところから線対称の文様が浮かび上がる、などというのは近いといえば近いかもしれない。

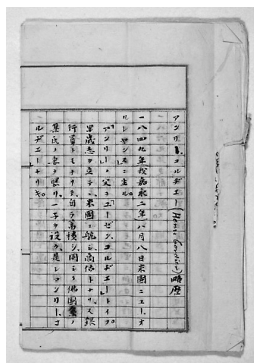
いずれにせよ、写真とか現物を並べて似ていると思ったわけではなくて、発掘でこういうものが出ましたというのが写真で送られてきて、それで見憶えていてこの盤と出会ったので、その何となくの雰囲気なんですけれども、やはりここに漢時代のいいものがある。それはやはり個人的にも買って帰りたい。梅原末治は学術的な立場でいうけれども、個人的な思い出と関わるものだからぜひ購入したいというのはわかるような気がいたします。

そして、細川護立が入手したものは、入手して護立のところに収まってお終いではありませんでした。昭和3年（1928）に華族会館で行われた展覧会に護立が入手した唐三彩類が出ています。それは図録に載ります。それから、昭和7年に帝室博物館の展覧会に細川護立入手の銀器とか銅器も出ているんですけれども、そういったものが出ています。そして、また図録に載ります。

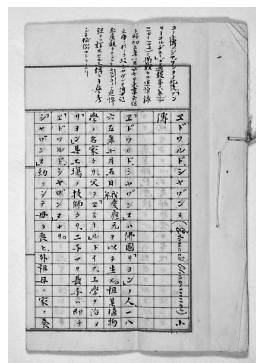
これは『唐三彩図譜』（東洋陶磁研究所編, 岩波書店, 1928年）です（スライド：『唐三彩図譜』表紙, 重要文化財「三彩宝相華文三足盤」；本稿には掲載せず）。その前の年に護立が収集した「三彩宝相華文三足盤」（スライド8と同図）、これが図録の表紙を飾っています。



スライド 16 重要文化財「銀人立像」



「コルディエ略歴」



「シャヴァンヌ伝」

スライド 17

それから、これは『周漢遺宝』（帝室博物館編，大塚工藝社，1932年）（スライド：『周漢遺宝』；本稿には掲載せず）。復刻版ですが。こういった図録に護立の銀器類が載ったわけですね。

【スライド 16：重要文化財「銀人立像」】

それで、エピソードなんですけれども、内藤湖南と狩野直喜、この銀の小像を見て2人とも感嘆した（スライド：内藤湖南顔写真，狩野直喜顔写真；本稿には掲載せず）。内藤湖南は「狩野の先祖だ」といったと。それに対して狩野直喜は「いや，内藤君によく似ている」と。2人の写真を見ると，こうい合うのも何となくわかるような気もいたします。余談です。

狩野直喜は熊本出身の漢学者，中国学者でした。ことのほか細川護立とのつながりが強い方です。ですから，頼まれ事なども多かったようです。

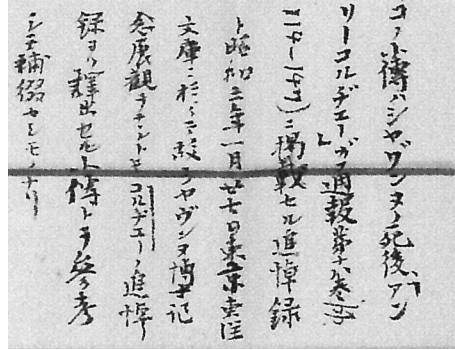
【スライド 17：「コルディエ略歴」，「シャヴァンヌ伝」】

狩野が書いた「コルディエ略歴」と「シャヴァンヌ伝」，これを侯爵閣下のご下命により作ったといっています（スライド 17）。今，永青文庫で展示しています。

【スライド 18：「シャヴァンヌ伝」部分】

3館連携ですからアピールいたしますが，「シャヴァンヌ伝」は1枚目の上の部分，その4行目ですが，注釈です，「東京東洋文庫ニ於イテ故シャヴァンヌ博士ノ記念展観ヲ…」と書かれています（スライド 18）。東洋文庫で展覧を見て，作ったんですね。東洋文庫の展覧の際の追悼録などから訳出した小伝を参考にしたことを注記しています。東洋文庫が東洋学の研究において，この当時から大事な研究機関であったかということもわかります。

「コルディエ略歴」とか「シャヴァンヌ伝」を護立が狩野直喜という学者に書かせたわけですが，護立は，東洋学者のコルディエの旧蔵書をヨーロッパ旅行中に購入しています。そ



スライド 18 「シャヴァンヌ伝」部分



「加彩舞伎俑」

「唐美人図」梅原龍三郎

スライド 19

して、昭和5年に熊本でその本の展示会をしていますので、これと関わりがあるのではないかと想像しています。

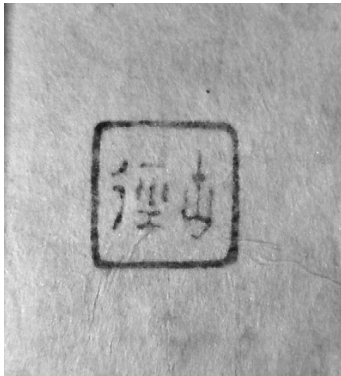
学者との関わりの中で、蒐集に当たってアドバイスをいただくという関係があった。でも、それだけではなくて、蒐集したものが彼らの研究に役に立つ。展覧会に出品を求められれば出す。そして、そこから研究がさらに広がっていくということがありました。

それは実は芸術家のほうでも同じことがいえます。この部分で登場するのはこの4名、梅原龍三郎(1888~1986)、小林古径(1883~1957)、安田靉彦(1884~1978)、高野松山(1889~1976)です。

梅原龍三郎は護立とはかなり親しい間で、一番左側が息子の護貞、中央が梅原龍三郎夫妻という形です(スライド 梅原龍三郎夫妻および細川護立・護貞父子らの写真;本稿には掲載せず)。

【スライド 19:「加彩舞伎俑」(左),「唐美人図」梅原龍三郎(右)】

「加彩舞伎俑」という作品がありますが、これを梅原龍三郎は壺中居で行った展観を見て、



スライド20 「環頭銅刀」(上),
「環頭銅刀」箱蓋裏「古径」印(左)

「いいものだから借り受けたい。借り受けて描きたい」といってお借りしています。そして、この作品ができ上がりました(スライド19)。

【スライド20:「環頭銅刀」(上),「環頭銅刀」箱蓋裏「古径」印(左)】

小林古径(スライド:小林古径顔写真;本稿には掲載せず)。小林古径の場合はちょっと違うんですが、この「環頭銅刀」という非常にきゃしゃな美しい刀があるのですが、その箱のふたに古径印が押してあります。これはどういうことなのか、ちょっとわからないんですが、古径が所蔵していたものが護立の手に渡ったのか、あるいは、古径が護立が所蔵していたものを見ただけなのか、わからないんですが、何らかのつながりがあったことは事実です。

それから、安田靱彦の場合は、この重要美術品の「透獣文鞘付銅剣」(スライド:安田靱彦写真;本稿には掲載せず)。

靱彦に「孫子勒姫兵」(霊友会妙一記念館所蔵)という作品がありますが(スライド「孫子勒姫兵」安田靱彦;本稿には掲載せず)、この右側、孫子が剣を持って姫の兵たちと対峙していますけれども、その部分ですね、細川護立が語っています。「孫子が刀を揮り上げて居る図ですが、その刀の鞘がこれです。」そして、友人の美術史家、この人も学習院出身ですが、児島喜久雄(1887~1950)に「これは事に依ると僕の持つて居るスキタイの銅剣の模様を何かで見て描いたのかも知れないと思って」聞いてもらったところ、安田靱彦は、「細川侯爵のスキタイの銅剣の模様を拝借しましたと答へた」そうです(スライド:重要美術品「透獣文鞘付銅剣」,「孫子勒姫兵」部分図;前者はスライド21,後者は本稿には掲載せず)。



スライド21 重要美術品「透獸文鞘付銅劍」
中国・春秋時代 前6～
後5世紀 永青文庫所蔵



スライド22 重要美術品「透獸文鞘付銅劍」裏面

【スライド21：重要美術品「透獸文鞘付銅劍」】

【スライド22：重要美術品「透獸文鞘付銅劍」裏面】

この孫子が持っている劍と鞘。劍のほう、柄上部分が八の字になっているところがあって、それが表わされています。それから、その裏面は、こういうふうにV字型を透かして作っているのがわかりますよね（スライド22）。それがこちらにも描かれているので、靱彦は本当に護立のこの劍の図柄を借用して、歴史画を描く素材としたということがあったようです。

最後は、高野松山ですね（スライド：高野松山写真；本稿には掲載せず）。この方は熊本県出身の人間国宝です。細川家から援助を受けて、細川邸内に住んで、細川家の御用をしながら自分の制作もした方です。

【スライド23：国宝「金銀錯狩獵文鏡」(左)、「蒔絵狩獵文鏡」高野松山(右)】

「金銀錯狩獵文鏡」は、この松山がつくった蒔絵の箱に納められています（スライド23）。瓜二つとっていいほどです。これを作るのは、やはりこの国宝の鏡を丹念に観察しなければできないことですね。制作者としては非常に勉強になったと思います。こういうことをやっていました。

まとめます。まず細川護立は楽浪の漢代遺跡の発掘支援をするということで、東洋学、東洋の考古学の分野といった方が適切かもしれませんが、支援をすることで東洋学に寄与しました。

それから、東洋考古学の遺物を蒐集しています。学者から情報提供を受けていますが、受けるだけではなくて、展覧会への出品協力があれば、それに応え、熟覧調査の要望があれば、



国宝「金銀錯狩獵文鏡」



「蒔絵狩獵文鏡」高野松山

スライド 23

それを受け入れ、研究成果の公開ということで本などが出るときには図版をどうぞお使いくださいということで、公開に理解を示していたことがわかります。

発掘支援に加えて、蒐集によっても東洋学、東洋考古学の研究の進展に寄与したといえます。

東洋陶磁の分野でも考古学と同じことがいえると思います。蒐集によって研究に寄与しました。唐三彩というのは唐の時代に作られたものではありませんが、20世紀の初頭に洛陽付近の鉄道建設で偶然掘り出されて、再び世に知られるようになったものです。20世紀の初頭の護立にとっては、非常に同時代的なものだったんですね。その唐三彩の研究が推進されていく中で、細川護立の収集品が役に立った、寄与したということは、先ほどの『唐三彩図譜』でおわかりになると思います。

護立の収集と東洋学の研究成果はまた美術にも寄与しました。梅原龍三郎や高野松山の制作、それから、安田韃彦の歴史画に材料を提供したことです。

私の発表は以上です。

(みやけ ひでかず 永青文庫学芸員(当時)／現・永青文庫学芸課長)